

## 「ワンフロア」「シナジー」で地域医療改革 新潟の渋谷氏

多彩人財

2024/5/8 11:00 | 日本経済新聞 電子版

医師不足が深刻な新潟県で、地域医療の改革に挑む医師がいる。渋谷裕之氏は脆弱な地方の医療を変えようと、30代で医学の世界に飛び込んだ。2020年に設立した医療法人メディカルビットバレー（新潟県長岡市）は、業界の常識にとらわれないフラットな組織運営を掲げる。理念に共感した医師が全国から集まり、地域医療に新たな風を吹き込んでいる。

「医者が不足している地方病院に転勤することになった」。医療に興味を抱いたのは、医師の友人の話がきっかけだった。医療とはまったく異なる分野で働いていたが、地方医療の現状をもっと知りたいと考え「まずは自分が医者にならないと」と、31歳で弘前大学医学部に入学した。

卒業後は山形県や秋田県、実家がある長岡市の病院に医師として勤務。医師不足で長時間労働が必要な現場や、ドラマ「白い巨塔」で描かれるような医学界特有のヒエラルキーの世界を自ら体験した。日々診療しながら「この構造を変えるにはどうすればいいか」と、起業家の視点を常に持ち続けていた。



メディカルビットバレーの渋谷理事長のもとには、理念に共感し全国から医師が集まる

20年に同僚だった医師などを集め、46歳でメディカルビットバレーを創業して理事長に就いた。複数の診療科が一つのクリニックにある複合クリニックとして、長岡市下柳にエールホームクリニックを開業。運営にあたって掲げたのは、「ワンフロア診療」「シナジー診療」といった新たな概念だ。

エールホームクリニックには内科、小児科、皮膚科、アレルギー科など10の診療科がそろっている。各科に専門医はいるが「医師全員が総合医マインドを持ち、専門分野を超えて連携できるチーム体制を重視している」。

例えばアトピーの子どもはまず小児科でみて、その後難しければ皮膚科へ。内臓の疾患からきている可能性があれば別の専門医が診察する。小型クリニックや総合病院にはない「縦より横につながる組織」を構築し、一つの医療機関にいながらスムーズに複数科を診療できる。

シナジー診療を掲げる理由は、医師不足を招く一因として他の医師に意見しにくい環境や閉鎖的なヒエラルキーからくる働きにくさがあると感じてきたからだ。目指すのは「白い巨塔」ではなく「白いキャンパス」。「壁のないフラットなステージで、医師やスタッフ全員が連携し切磋琢磨していきたい」。全員が筆を持ち、1枚の絵を完成させるような姿を目指す。

こうした理念に共感し、医師不足の新潟県において全国から渋谷氏のもとに医師が集まってくる。創業4年で現在の医師数は10人、平均年齢は42歳と若い。外来のみで入院対応はしていないため、子育て中の女性医師もいる。互いに連携し意見を言い合う職場環境はスタートアップさながらだ。

医師だけでなく経営に専念するマネジメント層の育成や即戦力人材の受け入れにも力を入れる。医療側と経営側も垣根なく意見交換できる環境を整えることで、新型コロナウイルスのワクチン接種事業も追い風に黒字経営を維持してきた。

23年10月には長岡駅前の再開発エリアにエールホームクリニック長岡を開業した。渋谷氏にとって医療は病気を治すだけでなく、「街づくり」の一環でもある。「健康になれば、おいしい物が食べられるしお出かけもたくさんできる。地域の活力に直結する」と考える。

人口が減少するなか、医師の確保は今後より厳しさを増していく。「地域医療を守るためには、新しい医療組織やシステムが必要」と力を込める。医師と起業家の両方の視点で、長岡発の新たな地域医療のカタチを構築していく。

(齊藤美保)